

第16回プラハ国際ブックフェア

名 称	Book World Prague 2010
日 時	2010年5月13日～16日 5月13日9:30～19:00 (出展社及び専門家のみ) 5月14日9:30～19:00 (一般者入場開始) 5月15日9:30～19:00 5月16日9:30～16:00
場 所	プラハ工業宮殿
主 催	The Association of Czech Booksellers and Publishers, Book World, Ltd
後 援	プラハ市
テーマ国	ポーランド
参加国	34ヶ国 (国と地域) オーストラリア、ベルギー、ブラジル、中国、チェコ共和国、エストニア、フィンランド、フランス、ドイツ、ハンガリー、アイスランド、アイルランド、イスラエル、イタリア、日本、ラトビア、リトアニア、マルタ共和国、ポーランド、ポルトガル、ルーマニア、ロシア、サウジアラビア、スロバキア、スロベニア、韓国、スペイン、スウェーデン、スイス、台湾、トルコ、イギリス、アメリカ、ウェールズ
出展社数	416社 (昨年度319社)
ブース数	294 (昨年度200)
展示面積	2,930㎡ (昨年度3,291㎡)
入場者数	40,000人
入 場 料	13日120czk、14日100czk、15日100czk、16日50czk、 4日間200czk * 1czk = 約5円 * 6歳までは無料 6歳～18歳、大学生、60歳以上は半額 家族：大人2名有料 内子供15歳未満は無料

報告：池満幸一 [(株)フレールベル館 出版営業部]

はじめに

プラハブックフェアは 16 回目を迎え、日本の出展は今回で 3 度目。今回は The Japan P.E.N.Club(日本ペンクラブ)の方々とプラハブックフェア会場にて合流の予定。

日本ペンクラブの方との打ち合わせを 4 月 23 日午後 16:00 ~ 出版文化国際交流会にて常任理事堀武昭さん、子供の本委員長長野上暁さん、那須田淳さん(ベルリン在住)、末吉暁子さんの 4 名と出版文化国際交流会の専務理事石川晴彦さん、事務局長横手多仁男さん、佐藤佳苗さん 3 名と私とで行われた。まずブックフェア「日本ブース」の位置確認、「出展アイテムの確認」、次に会期中の 5 月 14 日会場にて実施予定の日本ペンクラブセミナーの「テーマ」について、「チェコペンとの交流」、「通訳の件」など、綿密な事前打ち合わせで終了。

5 月 11 日、成田 11:40 発スカンジナビア航空コペンハーゲン経由にて、プラハ・ルズィニェ国際空港へ 19:45 分、ほぼ定刻で到着し、ブックフェア会場近くのホテルへチェックイン。21 時を過ぎててもまだ薄っすらと明るい、22 時をまわる頃になると暗くなってきた。

ブックフェア前日

翌日 12 日 14:00 に在チェコ共和国日本国大使館専門調査員 坪井宏平氏と会場にて設営予定、それまで時間があるので早速早起きをしてプラハ市内へ散策に出かけた。ホテル近くの地下鉄ホレショヴィツェ駅から C 線に乗り地下鉄プラハ本駅にて下車、ここからまずカレル橋を目指し歩いた。ヨーロッパ中央部に位置する共和国、西部をドイツ、北東部をポーランド、南東部をスロバキア、南部をオーストリアに囲まれた内陸国であり、面積は 78,866 平方キロメートル(日本の約 5 分の 1)、人口は約 10,043 万人で(チェコ人 94%)、言語はチェコ語、宗教はカトリック 26.3%で無宗教 58.3%と無宗教が多い。日本も大半は特定の宗教を信仰しているという自覚が弱いのと似ている。1968 年プラハの春と呼ばれる改革運動(皆様もご承知だと思います)が起こるが弾圧された。1989 年ビロード革命により共産党は崩壊、1993 年にチェコとスロバキアが分離した。

市内はトラム(路面電車)が網の目のように走っており移動には不自由しないようだ。ユダヤ人墓地をとおり(ここは第二次世界大戦中、ナチスドイツによって占領されユダヤ人約 5 万人がナチスドイツによって殺害され墓地ができた)、旧市街などを抜けカレル橋(確かアメリカ映画のミッション・インポッシブルの舞台にもなった場所)へ、カレル 1 世が作った有名な橋だ。橋の上には 30 人もの聖人の像が並んでおり、まるで宗教ギャラリーの中にいるような雰囲気が漂っている。カレル橋からはプラハ城がよく見える。

橋の中央にキリストの十字架を抱いた像がある、その正面は昔処刑場であった出っ張りがある。橋を渡りしばらく歩くとプラハ城が町を一望できる位置に蒼然と建っていた、城の長い階段を登りきると(睡眠不足にはきつかった)市内が一望できる。ここから眺めるプラハ市内はまた格段と美しく見えた。神聖ローマ帝国の首都プラハに移され、プラハ城の拡張や、カレル大学の創立、カレル橋の建設とヴルタヴァ川東岸市街地の整備などの都市開発が行われた。プラハは大規模な戦火に曝されることがなく現在そのままの状態に残っている。9 世紀後半にはプラハ城が建

てられこの地は発達した。城内には聖ヴィート大聖堂（ゴシック様式 現在の建造物になるまで 600年の歳月がかかる）が堂々と聳えていた。

14時に会場へ行くと坪井氏、カレル大学大学院4年哲学部日本語学科（チェコでは小中学校9年、高等学校4年、大学3年、大学院2年）のイヴェタ・ロウビーチコヴァーさん、同じくカレル大学2年哲学部日本語学科のフィリップ・コテックさん3人が待っていてくれた。イヴェタさんはついこの3月まで、日本の神戸大学へ1年間留学しており、日本語、英語ともかなり流暢に喋られる。コテックさんは、まだこれからというところらしくあまり理解できないそうだ。雑談しているなかで、彼らに通っているカレル大学の学費が無料であるということで驚いた、実際学生たちの家計は助かっているらしいが教授たちの給料はものすごく安いらしく逆に苦しいらしい。「あのね」と彼らに話かけるとどうも二人とも顔を見合わせコテックさんが怪訝な顔をしている。何故かと理由を聞くとチェコ語で「あの」がはいで「ね」がはいえ、つまり「あのね」はチェコ語では、「はいいいえ」になってしまうらしい。イヴェタさんは理解していたが、コテックさんは困惑していた様子だ。

日本から送られた展示用書籍及びカタログ等の入ったケースは全部で10箱、早速手分けをして開封作業をし、ブース内（3m×8m）に展示開始、展示図書は下記のとおりである。

1) 英文図書

日本文学27、日本語教材15、社会科学14、自然1、芸術19、伝統51、写真集6、英文児童書12、英文コミック11、計156冊。

2) 日本語図書

辞書8、和文児童書36、Japanese Book News No.61 / 62 掲載図書45、コミック89
料理・ファッション・その他31、国際交流基金関連図書9、計218冊 合計374冊。

3) 日本から送った物

日本についての英文カタログ300部、折り紙セット180セット、日本出版界の実用ガイド300部、JF発刊の季刊書誌情報誌No.62 100部、JF発刊の季刊書誌情報誌No.63 100部、JF発刊の情報誌等8部、国際交流基金Annual Report2部、国際交流基金Personal Set 10部、PACE:50Years of Effort and achievements2部、JBPAカタログ20部、その他（KI,TUTカタログ）60部。

中央にコミック、新刊文芸書、両サイドに文芸、伝統、自然、芸術、社会科学と写真集、辞書、児童図書関連、その他を陳列した。面陳用の什器だけでは並びきらないため、搬入時のダンボール箱を使い、臨時に平台を作った。日本の風景や文化の映像を流すため、中央少し右手にテレビ（32インチモニター）を設置、全作業が終了したのが17:00時頃になった。ポスターがなく殺風景なため日本大使館文化センターへ伺いそれらしき物を物色し、明日坪井氏が持ってきてくれるとの事で、坪井氏、アテンダント2名、在チェコ共和国日本国大使館三等書記官 塚本公平氏、計5人でそのまま日本大使館近くにて夕食を取ることにした。

ブックフェア・オープニング

ブックフェアの会場は CENTRAL HALL が海外出展ブース、LEFT WING、RIGHT WING がチェコの出版社ブース及び海外共同ブースとその他となっていた (LEFT WING は 2 年前に火事で焼けてしまい天井がテント張りになっていた)。

オープニング・セレモニーが始まる前に、在チェコ共和国日本国大使館 特命全権大使原田親仁氏に挨拶。

10:00 ~ CENTRAL HALL の中央奥の客席が 80 席ほどの比較的狭いスペースにてスタート、報道関係者で溢れていた。そんな中、まずはブックフェア主催者ダナ・カリノヴァさんが挨拶、続いてチェコ文化大臣パーツラフ・リードヴァウフ氏が「今回ポーランドがテーマ国として参加していただけてとても嬉しい、スロバキアとポーランドはとても大事な国、言語も近い (チェコ語とポーランド語)」。続いてポーランド文化大臣ボグダン・シンマノスキー氏が挨拶して約 30 分でセレモニーが終了した。

ブックフェア

初日は出版関係者のみの入場だったので、オープニング・セレモニーが終わったあとの会場全体は落ち着きをとり戻し、この日に限っては専門家みの来場で終了。その日 20 時よりポーランド大使館にてレセプション・パーティーが催されるので、日本ペンクラブの堀さん、野上さん、那須田さん、寺崎百合子さん、講談社部長の金沢千秋さんと大使館へ向かった。ポーランド大使館へ到着したときは、すでに日本大使館の塚本氏、坪井氏が、到着しており、後に原田大使もお見えになった。20 時よりレセプション・パーティーが生演奏で始まった。

ブックフェア会場にてオープニング・セレモニーで挨拶されたポーランド文化大臣ボグダン・シンマノスキー氏が 5 分程度で挨拶を終え、飲食が始まった。このポーランド大使館は、他の大使館とは比べ物にならないほど面積があり、特に庭は手入れされておりなにより広い。何といてもプラハ城を降りてきたらポーランド大使館がすぐに眼下に広がり、場所的には最高である。ビール、子豚の丸焼きなど他、数多くの食べ物があり大盛況。パーティーのあとに日本ペンクラブの堀さんたちと場所をかえることにした。門を出る前に振り返ると薄っすらと日暮れ行く中に、ポーランド大使館の庭とプラハ城に続く階段が視界に入り、非常に幻想的で美しく見えた、「もう二度とここへは入れないな」と思いながら後にした。

2 日目は朝から一般客が雨にも拘らずオープン前から会場入口に並んでいた。中には中学生、高校生らしきグループが学校の先生に引率されている姿も見受けられた。

午後には「日本ペンクラブ」のセミナー (17:30 ~ 18:30) テーマ「日本の子供の本の現在」が始まった。座席 20 席ほどであったがほぼ満杯の状態であった。

司会は堀さん、パネラーは野上さん、那須田さん、寺崎さん、末吉暁子さん (前日遅く到着された児童作家)、プラハ在住の出来根育さん (児童作家)。

まず堀さんが最初に「日本ペンクラブ」について。「日本ペン」は平和を希求し、言論表現の自由を守り、また人権や地球環境を守るためにさまざまな活動を行っている文学者の団体です。

日本独自の組織ではなく、ロンドンに本部を置く国際ペンの日本センターとして、世界各国のペンセンターと連携して活動しています。言論表現の自由は、民族・言語・宗教・思想の枠を超えて守られなければなりません。また権力や財力・暴力などによって左右されてはなりません。言論表現の自由が抑圧され、あるいは奪われる最も顕著な状況が戦争です。戦争は人権を無視し環境を破壊します。日本ペンクラブは、あらゆる戦争に反対します。どのような理由であれ、言論の自由を歪め、暴力によって一方の論理を押し通すということを認めません。あくまでも言論活動によって対立を緩和し、平和を維持していきたいと考えています。そのための「文学の力」を信じています。また、現在は戦争のみならず、環境破壊が平和を脅かして人権を侵害しております。日本ペンクラブでは、こうした問題にも積極的に取り組んでおります。13の委員会がある中で、2009年に新たに「子どもの本」委員会が新たに設置された。今回のセミナーで「チェコペン」との交流をより深め、日本の子供の本の現在を皆様にお伝えすることができれば幸いです。委員長に野上氏、副委員長に金沢さん、会員に那須田氏等々が属しており、本委員会の目的は海外の子どもの本の著作者と交流を図ること、将来の書き手、読み手となる若い世代に本への関わりを通じて文学への親しみを養成すること、表現の自由や人権などについての意識を培うこと、豊かな読書環境の育成することである。

野上さん、「日本の子供の本」についてですが、マンガだけではなく、「絵本」「読み物」「辞書」など、子供の本の新刊は年間約2,000タイトル出版されている。1タイトルで累計100万部を超えている出版物も約200タイトル以上あり、また世界中で翻訳されている出版物もたくさんあります。マンガと違って絵だけみて理解できるものではありません。今回は日本を代表する作家さんを紹介させていただきます。

末吉さん『ざわざわ森のがんこちゃん』、『ぞくぞく村』シリーズなど、多数紹介。那須田さん『ペーターという名のオオカミ』、『少年のころ』、『一億百万光年先に住むウサギ』を紹介。出来根さん、『マーシャと白い鳥』、『もりのおとぶくろ』、『山のタンタラばあさん』3タイトルを紹介。

その夜は、チェコペンクラブの副会長であるマルケッタ・ハイカロヴァさんとプラハ市内のカフェルーブルにて食事し情報交換をした。マルケッタさんは日本の出版事情にはあまり知識がないようでいろいろな事を知りたがっていた。我々もチェコの出版事情について質問してみた。チェコの出版社数は4,333社あるが実際に書店店頭にて売られている出版社は約600社余りだそうだ。

書店の書籍の売上高は推定110億czk、日本円にして550億円。日本の書籍の売上高（2009年度）は約8,492億円だが人口対比からすれば（日本の人口約12,770万人で、チェコの人口約1,040万人の12.8倍）日本人一人当たり年間書籍購入額（単純に割ると）6,646円、チェコ人が5,288円。年間所得のことを考慮すると、チェコの人はよく本を買って読んでいるようである。

3日目、朝からかなりの人がオープン前から列をなしていた、この日も朝から冷たい雨が降っているにもかかわらず土曜日ということもあり、大人から子供まで幅広いお客がチェコブースのSale目当てに盛況であった。

日本ブース The Japan Foundation / PACE

国際交流基金・出版文化国際交流会共同ブース（The Japan Foundation / PACE）には会期中1,070人ほどのひとが訪れアテンダントのイヴェッタさんとコテックさん共々対応におわれた。一番多かったのは購入したいのだがどうしたら買えるのか、今すぐに売って欲しいとの希望が多かった、日本ブースは販売目的ではなく「文化、伝統」などの交流が目的であることを理解してもらい、やはり日本の出版物に興味があるのだろう。

特に「和食」、「庭」、「京都」、伝統文化に関する物や「折り紙」「ファッション誌」のビジュアル系の書籍などが人気で集まり、「日本文学」、「コミック」（名探偵コナン、ドラえもん）には人だけかりができるも実際手に取って見る人は少なかったようである。

「14th Krakow, Poland Book Fair」の展覧勧誘をしに女性2人がJapanブースをおとずれ、是非日本ブースを出して欲しいとパンフレットを受け取った。またブルガリア人のセブデリーナ・コスタディノヴァさんはプラハ市内にあるドイツの出版社に勤めており、自分の絵を売り込みにやってきた。残念ながら今回の展覧趣旨をイヴェッタさんに説明してもらい納得していただく。またクララ・トルンコヴァさんチェコの出版社がどうしたら日本で出版できるのか、などの質問があり「著作権買い」ではなく「著作権売り」に質問が多くあった。

テレビモニターから映し出される日本の映像は、チェコ人にとって珍しい物なのか、3日目（土曜日）は人だけかりが絶えなかった。

日本人留学生（神戸大学、東京外国語大学）の学生さんも、日本ブースに立ち寄って「コミック」「日本文学」を懐かしいのであろうか、手にとって見ていた。

折り紙は子供から大人まで人気があり、私が折り紙で鶴をテーブルで折っていたら興味深く見ていた。どうやったら「鳥みたいな物」が折れるのだろうか？次から次へ列ができ折るのが大変なほどであった。イヴェッタさん、コテックさんも加わりミニ折り紙教室に盛り上がりを見せた。

海外からの出展社

今回のブックフェアのテーマ国ポーランドブースは、会場のセントラル・ホールの入口正面にてかなりスペースを取っていた（日本のブースの約5倍で全体的に赤で統一）。

オープンセレモニーにはテンポのいい生演奏（ラテン系）でお客を魅了していた。正面に受付両サイドに「新刊コーナー」「文芸書」「児童書」「芸術書」他、後方には若干の書籍販売コーナーとクレヨンとカラーコンテなど使って「お絵かき」のワークショップを行っていた、その横に「ぬいぐるみ」などを多数展示、中央には空洞のスペースがありここは何に使用するのだろうかと思いきや、3日目に突然音楽がかかり狭いスペースで「ダンス」が始まった。

スロヴァキアブースは、ポーランドより少し小さめのスペースであるが、海外出展社ブースでは2番目の広さ、ここでは商談スペースを広く取っておりテーブルが5つ用意され、商談（著作権売買）が常に行われていた。4日目となるとお酒を飲みながらのリラックスした雰囲気の中での商談だった様子。3番目の広さのフランスブースは特に児童図書のスペースを広く取っており約200点余りが展示されており賑わっていた、商談スペースも若干取っていた様子。ロシア、

イスラエル、サウジアラビア、のブースでまず目につくのは、テレビモニターで国内風景など映像を流していた。展示タイトルとして 300～500 タイトル前後だった。

今回海外出展社は 34 カ国であるが、セントラル・ホール（海外出展社）にブースを出展している国は 17 カ国で残りの 17 カ国は両サイドのホールに散らばっていた。最終日（日）は 16：00 までと言うこともあり、会場内はわりと閑散としており中国ブースはすでに無人になっていた。

チェコ書店事情

ヴァーツラフ通りに面し AKADEMIA(アカデミア)という書店がある。歴史は建物から想像するかぎりでは、かなり老舗であると思う。2階建ての店内はモダンな造りをしており、なるほど老舗でゆっくり本を選ぶには最適な書店である。まず 1 F は通常の文芸書を中心に棚に収まっており平積みスペースはそれほどない、よく見ると Ryu Murakami 『Cary』が棚の中から面陳されていた。出版社は ARGO、チェコで有名な出版社らしい。

児童図書は 1 回奥にスペースを取っており、棚で 5 スパン、70 点ほど陳列できる平積み台が 1 台あった。クロテック クニジュニー クルブ（動物などのコンパクト絵本）が平積みされていた。

石段の階段を 2 F へ上がると、専門書が数多く棚にあり一番奥には café Bar がありビールを飲める。

アカデミアの道路を隔てた、少し右手に PALAAC KNIH（パラス クニフ）がある。プラハで 5 店舗を展開している書店らしい。店の入口には威喝そうなガードマンが立っていた。中に入ると巨大売場が広がっていた、店内にもガードマンらしき人が立っていた。B2,B1,1F,2F と 4 層になっていて多分 4,000 坪は超える広さだ。なんと言っても平積みの凄さは日本では考えられない。ピラミッド積みとでも言うんでしょうか、私の目の高さまで文芸書が渦高く積まれたものが何台もあった。これは半分パフォーマンスなのかもしれないが兎にかく凄い、4 年前に上海の書店を回ったときに一度みたが、ここまでではなかった。2 F へ上がると（エスカレーターで）児童図書コーナーがざっと 30 坪～40 坪はありそうな売場があり、Lexikon(レクシコン)「ハリーポッターのガイド本」が平積みされていた。他に KiKi に似ているチャロデイニツェ・シュコロウ・ポヴィネエー、タイトルは『もっとも恐ろしい魔女』、魔女の読み物（小学生中学年向き）が平積みされていた。児童書で今一番売れているのは「アリス」関連だそうだ。『機関車トーマス』も平積みされていた。B1,B2 にはそれぞれ海外の本や文具その他が、またここにも café Bar がある。

そういえばチェコペンの副会長のマルケッタさんが、チェコは、委託販売で返品が OK だそうだ。日本の流通と同じで出版社⇒取次（大手 5 社）⇒書店という流通で、仕切りは物によって取次への売上原価は変わるそうだが約 50% で収めるそうだ。日本と比べ仕切りが低く、出版社の利益がどうなのか心配になるぐらいだ。価格帯は文芸書 200 頁～300 頁で 200czk～250czk（1,000 円～1,250 円）、500 頁～600 頁で 350czk 前後（1,750 円）、若干日本よりは安いぐらいだ。

文芸書が積まれている中で、今人気上昇中なのが、外国文学（翻訳物）で左ページがフランス語や英語のオリジナルで右ページがチェコ語で書かれている出版物だそうだ。これは日本では「横書きと縦書き」になるから難しいなと思った。

学生は学割があり、大学生は年間 200czk 払えばカードが発行され 10～20czk 前後、店によって割引率が異なるが値引きしてくれる。

チェコでは土曜日午後から日曜日にかけて一般書店は休みで大手書店のみ営業している。日本の書店は、ほぼ年中無休の店が多く状況が違うようである。

アンケート結果

日本ブースを訪れたチェコの方々にアンケートの回答をお願いした。アンケート総数は 49 通。今回「アンケート」に答えていただいた方に、お礼に折り紙セットと私が日本から用意してきた菓子を差し上げた。

Q1 日本ブースを訪れた目的は

- ビジネス 6 人
- 日本に関心があるから 35 人（特に、本 6 人 文化 13 人 日本語 6 人）
- 偶然通りかかった 10 人
- その他 1 人

Q2 日本ブースの印象はいかかですか

(1) 図書数と種類

- たいへん充実している 32 人 充実している 14 人
- あまり充実していない 0 人 充実していない 0 人

(2) 展示の仕方

- たいへん見やすい 15 人 見やすい 30 人
- あまり見やすすくない 1 人 見やすすくない 0 人

(3) アテンドの対応

- たいへん満足 34 人 満足 14 人
- やや満足 0 人 不満 0 人

(4) 総合評価

- たいへん満足 29 人 満足 18 人
- やや不満 1 人 不満 0 人

Q3 特に高い関心のあるジャンルはなんですか

- 小説 12人 芸術 33人 文化 25人 政治/外交 10人
地理 1人 社会 5人 経済 0人 環境 6人 歴史 16人
思想/宗教 8人 漫画/アニメ 17人 その他 8人

回答者

- 性別 男性 14人 女性 32人
年齢 10～19 13人 20～29 11人 30～39 5人
 40～49 7人 50～59 9人 60以上 3人
職業 編集者・出版営業 0人 図書館司書 5人 教育者 4人
 研究者 5人 学生 20人 その他 14人

終わりに

ヨーロッパの中央に位置し、何世紀の間に幾つもの戦争に巻き込まれたにもかかわらず、歴史的景観が残されているプラハは、本当に魅力的な町だ。第二次世界大戦では「ナチスドイツ」に占領され、その後約40年間は旧ソ連の影響をうけ、社会主義国であった。

現在チェコ共和国に1,000人以上の日本人が暮らしている。日本の出版物は殆ど書店店頭では手に入らない。日本ブースでよく聞かれた事、「この本が欲しいがどうしたらよいのか」との問い合わせが非常に多かった。対応としては日本から用意した Practical Guide to Publishing in Japan に掲載されている「インターネット」での入手方法をご案内させていただいた。日本の「文化」、「伝統」については、彼らにとっては未知なる事で、チェコに限らず外国人にとっては興味深いものであるに違いない。

私なりに勝手に考えている課題は、出展アイテムの見直しが少し必要に思える。「空手」「マンガ」のコーナーに人だかりはできたが実際手に取らなかったのは（チェコに限ってなのかもしれませんが）、「空手」は出版物が古すぎたのと、「マンガ」はドラえもん、名探偵コナンではなかったことに思える（今人気の『ワンピース』などがよかったのでは）。「日本の料理」「庭」「建築」などをもっと厚くしてはどうか。ビジュアル系のファッション誌は本当に人気（特に10代の若い世代）があった。

ブックフェア期間中、在チェコ共和国日本国大使館員、アテンダントの方、日本ペンクラブの皆さんには滞在中大変お世話になりました。パブでは、みなさんと楽しく歓談させていただいたり、情報交換の場であったり、本当にお世話になりました。そんな中でも地元の人たちは静かに語り合っている姿を見かけました、チェコ人を見ていると真面目で控えめという印象を受けました。主催者のダナ・カリノヴァさんにはいつも日本ブースを気にしていただき、最後には「プラハ」の写真集までいただきました。また国際交流基金、出版文化国際交流会の方々にはこのような機会を与えて下さったことに深く感謝申し上げます。

